



半魚人の図(出典: R.H.Codrington (1891) *The Melanians: studies in their anthropology and folk-lore* p.259.)

◆◆◆半魚人の正体◆◆◆
 右端の資料の頭部は魚で、胴体と四肢は人間の形をしている。手には魚をもち、尻には魚の尾鰭おびれがあり、魚の口吻くちゅうがペニスに突き刺さっている。魚と人間の両方の属性をもつ木製の造形物は、半魚人といつてよいが、いったいこれは何なのか。
 これは魚釣りの道具で、とりわけトビウオ用のものである。ちょうど尻のあたりに見える茶色の「くの字」形の部分に餌となるヤドカリの肉をつける。ふつうのフック型の釣りばりとは異なりゴージか(かり)とよばれる。餌をつけて海面にこの漁具を流すと、半魚人はプカプカと浮く。トビウオが餌に喰いつくと、浮きの動きが

◆◆◆トビウオ漁の謎◆◆◆
 なぜこうした半魚人のイメージが生まれたのだろうか。一九世紀に英国の人類学者であるR・H・コドリンソンはメラネシアの調査をもとに『メラネシア人——人類学と民俗の研究』(邦訳なし)を著した。そのなかに、前述の漁具ときわめて似た図が掲載されている(上図)。それを見ると、頭部は魚で、足の指が小さな魚からなっている。胴体と四肢は人間の形をしており、左手に胸鰭むなびれの大きな魚をもっている。おそらくトビウオであろう。また、肘は多くの小魚がつかった状態で描かれており、口吻が長い。尻には魚の尾鰭がついて

おり、背中には背鰭せびれの細かい突起がある。この図はサンクリストバル島の現地住民が描いたものであり、シー・ゴースト(海の死霊)をあらわす。人間が死後、海の死霊となつた存在はアダロとよばれ、人間に危害を加えることがある。人間が航海から戻らなかつたり、海で病気になるのは、海の死霊が放つた槍やりや矢に刺されたためとされる。槍は口吻の突き出たサヨリを、矢は空を飛ぶトビウオをそれぞれ指すメタファー(隠喩)となっている。人びとは海の死霊の怒りを鎮めるため、ビンロウの実や食物を海に投げ入れた。
 それでは、海の死霊をあらわす漁具でトビウオを獲る行為はどう説明できるだろうか。海の死霊の使う武器がトビウオである。トビウオは人間に危害を加えることがあるが、海の死霊とは親密な関係にあるため、海の死霊を見つけるとそばに寄ってくる。
 ただし、海鳥や魚の形をした浮きにわざわざトビウオが喰いつくことをうまく説明できない。トビウオは死霊に引き寄せられるのか。海鳥や魚の浮きは単なるかざりで、トビウオは餌に喰いつくだけなのか。人間の技術のもつ意味は不可解で、その謎は深まるばかりだ。

想像界の生物相 海の死霊とトビウオ漁

あきみち ともや
 秋道 智彌
 民博 名誉教授



資料名 | 釣具
 標本番号 | 右から H0124948、H0124949、H0124954
 地域 | ソロモン諸島
 サイズ | 右から 長さ 54cm、50cm、54cm